

『福澤諭吉と勝海舟』の生涯

<http://hsaeki13.sakura.ne.jp/ookubo1.html>

1. 『幕末』～『維新』→（キーワードは「掃除破壊」）

1823 年 勝海舟、江戸で生まれる。（幕臣[下級旗本]の子供）

1835 年 福澤諭吉、大阪で生まれる。（中津奥平藩の下級藩士の子供）

1836 年～1853 年 諭吉は、中津で過ごし、白石照山から漢学を学ぶ。

1840 年 海舟は、剣術修業に専念する。1843 年 剣術の免許皆傳を受ける。

1845 年 海舟は、永井青崖から蘭学を学ぶ。

1850 年 海舟は、赤坂田町に蘭学塾を開く。

1853 年 ペリー来航。勝海舟は、海防意見書を幕府に提出し高く評価される。

1854 年 諭吉は、中津から長崎へ行き蘭学を学ぶ。

1855 年 海舟は、長崎海軍伝習所勤務（4 年間）で、軍艦操練技術を習得する。

1855 年 諭吉は、長崎から大阪へ出て、緒方洪庵の適塾入門し蘭学を学ぶ。

1858 年中津藩の命令により、福澤諭吉は、大阪から江戸に出て、築地鉄砲州の奥平家中屋敷の中の小さな長屋の 1 軒で、蘭学の家塾を開く。慶應義塾の起源。

1858 年日米他オランダ・ロシア・イギリス・フランスと修好通商条約の調印。

1859 年 諭吉は横浜を見学して、オランダ語が役に立たぬことを知り、英語に転向する。教師に恵まれず、辞書を頼りに独学で研究する。

1860 年咸臨丸でアメリカに行く（1 月～5 月）木村 30 歳、勝 37 歳、福澤 25 歳。

同年 11 月幕府外国方の翻訳方（陪臣）に雇われる。

1862 年 諭吉は、幕府使節の翻訳方随員としてヨーロッパ 6 カ国を訪問する。（1 月～12 月）。帰国すると国内は、尊王攘夷一色であった。

1862 年 海舟は 7 月に軍艦総練所頭取に、8 月に軍艦奉行並に昇進する。

1862 年～63 年幕府内に二つの政治思想あり。一つは徳川慶喜主導の幕府による政治。もう一つは公武合体・雄藩連合による政治。勝海舟は最初から雄藩連合を支持していたが、福澤諭吉は当初、幕府主導を支持していた。

勝海舟は幕臣でありながら、幕府による政治に終止符を打ち、雄藩連合による政治の確立を着々と進める。1862 年に坂本竜馬と会い、竜馬を愛弟子にして、薩長連合を画策する。1864 年には西郷隆盛とも会って「これからは幕府の政治は無理であり、雄藩連合の政治を」と訴える。

1864 年秋に福澤諭吉は陪臣から幕臣に拔擢され、1864 年～1866 年の 2 年半、幕府を支持し「幕府強化論」を唱え、1866 年には、「長州再征に関する建白書」を幕府に提出する。しかし「第二次長州征伐」は失敗に終わる。

1864 年 5 月に勝海舟は軍艦奉行並から軍艦奉行に昇格したが、「幕府の海軍」ではなく「日本の海軍」建設をめざし、幕府の保守派に睨まれる。その結果 11 月に軍艦奉行を罷免される。

1866 年 1 月薩長同盟成立。5 月に勝海舟は軍艦奉行に復帰する。徳川慶喜から「第二次長州征伐」の（長州との）停戦交渉を任される。勝海舟は、最初から「第二次長州征伐」には反対であった。

1867 年 1 月福澤諭吉は、幕府の軍艦受取委員の随員として再びアメリカに行き、6 月に帰国。帰国途上から福澤諭吉は、公然と幕府打倒を叫ぶようになる。

1867 年 10 月に徳川慶喜は、大政奉還の上表を朝廷に提出。薩長はこれを不満として、12 月に王政復古を旗印としたクーデターを起こす。

2. 『維新』～『明治時代』→（キーワードは「建置経営」）

1868 年（明治元年）1 月鳥羽伏見の戦いで幕府敗北。勝海舟は 1 月 23 日に、陸軍総裁（幕閣の最高幹部）に就任。2 月 11 日、慶喜及び徳川家首脳会議で、「慶喜恭順」の方針を決定。

小栗忠順、永井尚志など主戦派は罷免、松平容保、松平定敬は登城禁止。

同年 3 月 13 日 & 14 日、勝海舟はイギリス公使のパークスを利用して、西郷隆盛と江戸無血開城の談判を行い成功する。

同年 4 月、福澤諭吉は、家塾を築地鉄砲州から芝新銭座に移し、慶應義塾と命名する。

同年 5 月 15 日、上野の彰義隊は、大村益次郎率いる官軍に、10 時間の戦闘で敗北する。勝海舟の自宅も菅軍の兵士に襲撃されるが、勝は田安邸にいて命拾いをする。

同年5月15日、福澤諭吉は、上野彰義隊の戦いの砲声を耳にしながら、慶応義塾で、ウエーランドの経済書の購読をしていた。

明治4年3月に福澤は慶應義塾を新銭座から三田に移す。

明治4年7月に新政府は、廃藩置県を実施する。

すると、諭吉は新政府を改めて見直す。今まで攘夷主義者と思っていた薩長を中心とする新政府が、積極的に「掃除破壊と建置経営」を行う姿勢を目の当たりに見て、諭吉の今までの考え方が180度変わり、積極的に新政府に協力する。

明治4年10月に新政府は、岩倉具視らを欧米に派遣する。

明治5年 福澤は「学問のすゝめ」を、明治8年「文明論の概略」を発刊。

明治13年1月に交詢社」を起こす。明治14年の政変で福澤は苦境に立つ。

明治15年福澤は「時事新報」を発刊。明治32年には「福翁自伝」を発刊。

明治10年西郷隆盛によって起こされた西南戦争については、福澤も勝も西郷に対して極めて同情的であったが、福澤は勿論、勝も参戦して西郷を応援することはなかった。しかし、西南戦争が落ち着いた後、福澤は「丁丑公論」を脱稿して明治維新での西郷の功績を称えた。西郷も明治12年に南葛飾郡淨光寺境内に自費で西郷の記念碑を建立した。

明治17年の甲申事変(朝鮮開化派によるクーデタ)を福澤は積極的に支持した。

明治27年～28年の日清戦争については、清国が朝鮮の文明化に反対するのを阻止するための戦争であるとして、福澤は積極的に支持したが、勝は「日清韓三国提携論」を唱えて真っ向から反対した。三国が提携して、西欧諸国による「アジア諸国の植民地化」に対抗しようと主張して、明治政府に強く訴えた。

明治維新後、勝海舟は徳川一門及び旧幕臣から成る「徳川共同体」の世話役を務め、「徳川銀行」を設立し、旧幕臣の経済的救済と徳川家の経済的安定のために努力した。

明治25年2月7日に長男小鹿が病死すると、海舟は徳川慶喜の10男で末っ子の「精」(くわし)を自分の継嗣とする事に内定する。

明治維新後の勝海舟の最大の功績のひとつは、旧主徳川慶喜と皇室(明治天皇)との和解の儀式を執り行った事である。それは明治31年3月2日に実現した。徳川慶喜が前将軍としての名誉も回復したので、「俺の役目もこれで終わった。明日からのことは若い人に頼むよ。」と言い残し、翌年(明治32年)1月19日に勝海舟、長逝。

明治 34 年 1 月に福澤諭吉は「**瘠我慢の説**」を発刊し（脱稿は明治 24 年）勝海舟が**「武士道精神」**を傷つけたと批判する。批判の対象となった標的の一つは、勝海舟が、薩長を中心とする官軍と一戦も交えず「江戸無血開城」を断行した事であり、二つは、戦争が終わった後、薩長中心の新政府に仕えて、伯爵になったり、勲章をもらったりした事である。同年 2 月 3 日に福澤諭吉、長逝。

明治維新後に、勝海舟が取得した主な官位、爵位、勲章等を年代順にまとめて
列挙すると、明治 6 年参議・海軍卿。同 8 年依願免官。同 20 年 5 月伯爵、同
21 年 4 月枢密顧問官、同年 10 月正三位、同 22 年 12 月勲一等瑞宝章。同 31 年
12 月勲一等旭日大授章。同 32 年 1 月 20 日（脳溢血で急逝した翌日）正二位。

尚、福澤諭吉は、維新後には、政府からの執拗なまでの勧誘にも拘らず、一切
の官位、爵位、勲章、等々を辞退し、教育家・思想家としての道を歩んだ。

3. まとめ

二人共、幕末・維新を生き、明治 30 年代前半まで、日本を西欧に負けない
国にするために、大きな貢献を致しました。

しかし、二人は仲が悪く、生涯を通して確執の関係でした。したがって、上記
の事績の中で、二人が共同で成し遂げた功績はありません。

勝海舟の主たる功績のひとつは、ペリー来航後に幕府に海防見書を提出し、
「日本の海軍」を建設して、日本の防衛力を高めた事です。当時、アジア諸国
の殆どの国は、西欧列強によって植民地にされました。植民地にならなかった
のは、日本とタイの二カ国だけです。

もう一つは、幕臣でありながら、早くから幕府の政治に見切りをつけ、雄藩に
働きかけて倒幕体制を作り上げ、1868 年に幕府の政治に幕を下ろした事です。

福澤諭吉の主たる功績は、幕末・維新前のアメリカ、ヨーロッパ等、3 回の
欧米諸国歴訪の経験を活かし、維新後に「日本の文明開化」のために汗を流し
たことです。具体的には、慶應義塾を設立し国民の教育に力を注いだ事、交詢
社を設立し、コミュニケーションの場を作り、国民の知識を深めた事、新聞社
（時事新報）を起こし、国民に情報提供を行った事、「学問のすゝめ」や「文明
論の概略」等の著書を発行し、西欧の文化を取り入れて、国民に独立自尊心
（一身独立して一国独立する）を植え付けた事などです。

「掃除破壊と建置経営」の観点から判断すれば、「掃除破壊」の人（江戸の人）
は勝海舟で、「建置経営」の人（明治の人）は福澤諭吉であります。以上